

沖繩の悲劇

中宗根政善著



昭和二十六年七月十五日 初版印刷
昭和二十八年三月二十五日 訂正六版發行
特定価一八〇円



著 者 仲 宗 根 政 善

発 行 者 吉 沢 豊

印 刷 者 秋 元 馨

印 刷 所 同盟印刷株式会社

東京都千代田区神田神保町一ノ四六

発 行 所 華 頂 書 房

振替東京三一九三三番

まえがき

第二次世界大戦で沖繩ほど戦禍を蒙った島は世界になかった。十幾萬の生靈の血を以って山河を染め、沖繩は「血の島」として世界に知られた。この「血の島」でも特に悲惨を極めたのは姫百合學徒隊の最後であつた。わずか十六歳から二十歳までのうら若い乙女らが、あれほどに激しかった戦争に参加して、かくも多數戦死した例は人類の歴史にかつてなかった。

彼女等とはもとより戦を好んで戦死したのではなかった。いたづける勇士をいたわり女性の持つ優しい天性の故に倒れたのであつた。

この悲劇が戦後、或は詩歌に詠まれ、或は小説に綴られ、演劇舞踊になつて人々の涙をそそいでいる、ところがその事實は次第に誤り傳えられ傳説化しようとしている。乙女らは沖繩最南端の喜屋武の斷崖に追いつめられて、岩壁にピンで自分の最後を記していた。

再びあらしめてはならない最後の記録であつた。彼女等が書き残そうとした嚴肅な事實を私は誤りなく傳えなければならぬ義務を負わされている。洞窟に残した重傷の生徒達のことを思うと、この記録は私にとっては懺悔録でもある。戦場に印した乙女らの血の足跡をありのまゝに記すことは、亡き乙女らへの供養にもなろうかと書き始めた。私は乙女らの胸に飾られた赤十字のマークが永遠に輝

くことを信じている。世界の人々が國境を越えてこの乙女めらに花を手向ける日が來ることを信じてゐる。

この記録は文學でもなく、生き残った生徒の手記を集めて編纂した實錄であり、氏名も日時も場所も正確を期した。肉親の方々に娘や妹の面影をしのんでいたとけたら幸せである。

原子爆彈の偉力をもつてしては、地上から戰爭をなくすることは到底不可能である。こうした嚴肅な事實をもっと深く考えるのであれば永遠の平和は望むべくもない。

七年忌を迎えるまでしまいこんであった原稿を吉田嗣延氏吉澤豐氏の御好意で上梓の運びに至ったことを感謝します。なお安谷屋シゲ子さんが、先輩の記録を丹念に整理淨書してくれたことを、附記して感謝します。

一九五一年六月

著 者 識

目次

一	艦砲射撃始まる	一
二	壕生活	一〇
三	卒業式	一四
四	黄泉の壕	一六
五	看護志願	二〇
六	白百合——洞門と雲雀——	二三
七	勝利の日	二五
八	小杉さん	二七
九	最初の犠牲	三
一〇	生き埋め	三三
一一	第一外科	三六
一二	第二外科	四〇
一三	生地獄の兵器廠	四四

一四	病院移動	三二
一五	擔架の上の學友	四
一六	糸洲	一〇六
一七	渡嘉敷良子	一六
一八	石室の軍醫	二三
一九	糸數用武	一五
二〇	眞空の綠野——深夜の水浴——	二八
二一	小山羊の死——最後の傳令——	三三
二二	波平最後の日——荒木軍屬と伊佐上等兵——	三九
二三	影二つ	一四二
二四	壕脱出	一五六
二五	死の解散	一五三
二六	奇遇	一九〇
二七	巖頭の歡聲	二〇〇
二八	自決	二二一

二九	死の彷徨	二八
三〇	學友の死と小鳥	二三
三一	國頭突破	二四〇
三二	姫百合の塔	二四七
三三	屍とゝもに	二六一
三四	塔	二六七
三五	淨魂を抱いて	二七〇

一 艦砲射撃始まる

一九四五年三月二十四日

ほのぼのとあけそめる空に、もう魔鳥のような機影があらわれ、今日も昨日にひきつゞき空襲だった。學校までも行けず、城岳食糧營團の壕の入口から空を眺めていると、昨日は慶良間へ慶良間へと飛んで、那覇の上空を素通りした飛行機が、今日は時々旋回しては天久・垣花の高射砲陣地に投弾していた。島尻の方から、聞きなれぬ轟音が大地をゆすぶってとどろき始めた。十時頃だった。那覇署の警官が壕に息せききって駆けこみ、「艦砲だ！ 港川に艦砲が始まった。——」と告げた。愈々上陸だ。来るべきものが来た。私はじっとして居れず、壕を飛び出し、飛行機のとび交う中を學校へと急いだ。風が強く、こりが立ちこめ、空はうすも、やのような雲に蔽われていた。開南中學から壺屋間の道路は、いや、いや、物一つなく、突破が困難なので、與儀試験所農場の想思樹のかげをつたい、鐵道線路に出て壺屋部落の石垣にそい、姫百合橋を渡って學校へたどりついた。鐵道線路下の暗渠即ち西の壕には西岡部長、仲榮間助八教諭以下一高女の寄宿生がいた。愈港川に艦砲が始まった。」とつげると全員ひきつったような重苦しい面持で、お互いを見合せていた。その足ですぐ東射撃場の壕に連絡に行った。寄宿舎南側の民家が、二百キロの直撃弾をくらい、木々葉微塵に破壊され、寄宿舎の石垣には生々しい彈痕が白く、扶桑の枝が折れてたれさがり、道路には土塊が飛び散っていた。東の壕に飛びこむ

と、散を亂して逃げた後で風呂敷や急救袋がちらかっていた。附近の民間壕に立寄って尋ねると生徒は識名の坂を登っていったという。溝にかくれ叢に伏し、木かげをつたわって飛行機をさけながらあとを尋ねた。西平・岸本兩教官に引率されて識名高射砲陣地に待避していることがようやく分った。この陣地は生徒が勤勞作業で八月以來半歳も軍に協力して構築したもので、高射砲隊もこの壕は貴女方のものだといって好意を示してくれた。兵は汗をふき／＼壕の整備に立働いていた。心と心が固く握手し兵隊に言い知れぬ親しさを感じ、その姿が拜みたいほどに尊く感じられた。一刻も時間を見失うにはならぬと、生徒も兵隊に協力して一日中壕の整備に立ち働いた。

監視哨のところではらく空襲の状況を眺めていると、つぶてのように遠く飛んでいる飛行機が忽ち頭上に大きな姿をあらわし、突如！急降下で襲いかゝり、すぐ眼の前の津嘉山に柱のような焰をはき、爆弾を投下して去った。天久・垣花の高射砲隊は既に沈黙していた。今晩中に讀谷の高射砲隊もひきあげるような話を聞かされた。豫定の行動だとはいうものの既に沖繩戦に／＼影がさしているのを直感した。

卒業生の龜谷シズさんが昨日からの空襲をくぐって遠く國頭から妹ノブ子をたずねて來ていた。防衛

隊に召集され首里飛行場作業に従事している父と夫に最後の別れを告げに來たのであった。

空襲は晩までつづいた。生徒は晝食も食べてはいなかったので隊長がわざ／＼百幾名の夕飯を用意してくれた。鍛冶屋軍曹は特に親切に生徒の世話を見てくれた。隊長は私達職員をよんで注意された。「實は只今軍では食糧の食いのばしをしている。夕食を炊いてやったことは内證にして貰い度い」と。隊長の好意に深く感謝した。

日もとつぷり暮れてしまい空襲もやんだので、仲宗根芳雄訓導と二人は一足先に識名の壕を出た。部落の人々も壕から家に歸って炊事を始めていた。赤々と夕日の沈んでいる慶良島は美しい微光に／＼まれて靜かだった。早速附屬にいった。主事室には二十三日卒業式に渡すべき卒業證書が黒い盆にのせられていて時計が未だ動いていた。壁には戦局の推移を示した太平洋の地圖が張られていた。殺數訓導が、既に陥落したサイパンを指さし、手をふるわせながら、「もうすぐですよ。今に來ますよ」と沖縄島にサイパンから線を引いていたのは二週間前だったが、早くも現實となったのだった。靜かに廊下づたい玄關を出ようとすると、小舎につながれた山羊が夕飼をねだってしきりに鳴いていた。解き放つてやる餘裕もなく門を出た。塀にそうて部長住宅にいそいでいくと後からよびとめる者がいた。玉榮訓導であった。「家族をつれていますので學校と行動を共にすることができませんからよろしく。」とすまなさそうに言っていた。もとより附屬訓導であり生徒を引率する直接の責任はなかつ

たが、責任感のつよい君の心根がうれしかった。君は疎開のため家族を郷里の勝連半島から那覇へつれて来ていたが、船に積んだ荷物一切を空襲で焼失しよう／＼無一物になって戦争にぶつかったのであった。住宅はひっそりしていた。一高女生は西の壕からひきあげ各自の部屋に歸って準備を整えているらしく、時々生徒の聲が寄宿舎から聞えた。一昨晩卒業生を送るべくステージを作り飾立ててあった食堂は、空襲警報がかかったので、そのまゝ暗くとざされていた。庭園の榕樹の梢は、ゆらぎもせず西空のあかりがほのかに漂うていた。西岡部長は「今日から軍司令部に行くことになった。野田校長は男子部に行かれる。御奉公の時が来た。」といつもになく靜かに話されたのであった。今晩愈南風原^{はなばら}陸軍病院へ出發することになったので城岳に荷物をとりに歸ってみれば、度々の空襲で城岳一帯は全焼し、その中に奇蹟的に焼け残った我が家が立っていた。いそいで玄關に入ると、いとこの仲里君が壕から歸っていた。隣の上間の親子も荷造りをしていた。必要な品だけをリュックにつめ大切にしていた圖書は机上にきちんと整頓して、研究の粹を蒐めた方言手帖だけをリュックサックにつめ込んだ。ふと氣がつくとポケット用の英和辭典が一冊あったが、何かしらこの辭書に魔がさしているようで幾度か手にしたりおいたりした。胸の中には十々空襲以來のさま／＼の思い出が入り亂れていたが別に感情の高ぶった撓^{なみ}挽もかわさず、ありふれたことをい／＼合^あって仲里君と別れた。上間の親子も門前に出て送って下さったので、これが一生の別れとなるだろうことを思^{おも}って町重に

別辭をのべたのであった。庭の芭蕉の葉が月影にゆれて別離に應えているかのようにみえた。

部長住宅の門に來ると鐵道線路の土手にもたれて生徒が二、三名小聲で校歌を歌っていた。暫くして全員部長住宅庭園に集合、部長は縁側に立ち最後の訓辭をこうされた。「愈米軍の上陸だ。平素の訓練を發揮し御國に御奉公すべき時が來た。姫百合學徒の本領を發揮し皇國のために働いてもらいたい。」と感慨にみちた面であざ／＼縁先からおりて一人々々に挨拶された。乙女等の胸は櫻の校章で飾られてはりつめていた。アルバムからはぎとった親兄弟、親しいお友達の寫眞を胸に抱きしめながら、部長住宅の西門から南風原陸軍病院へと出發したのは十時頃だった。塙のそばの扶蓉の木も皆の門出を祝しているかのように見えた。附屬校の前から練兵橋を通って識名の坂にかゝった。十々空襲で既に焦土と化した那覇市の殘骸が淡い月影に照らされている。姫百合學園の薨も月に照らされ、農場の木麻黄がしよんぼり立っていた。これで千幾百名の學徒は悉く姫百合學園を去ってしまったのである。戦に勝って再びこの學園につど、うのは何日の日か。人々の心の動搖にひきかえ何という靜かな晩であつたらう。あの那覇市の殘骸の中では背負えるだけのものを背負い、幼兒の手をひいて避難しようとおわてふためいている無數の人々のあることを思うと、十々空襲のことが惡夢のように浮んで來た。

十月十日の朝、羊齒をくわえて井手端に立っていると、高射砲の煙が西空の朝もやの中にぼん／＼

あがつた。朝っぱらから演習かなと思つてゐると、けたましくサイレンが鳴りひびく。空襲だ！
子供の手をひっぱって家庭防空壕にとびこむやたちまちずしん／＼と地ひびきがつたわる。民子がお
びえて私の顔をみつめていた。今の爆弾は二、三町と離れてはいない。學校へ出掛けるぞ！といった
が妻は返事がなかった。妻子を壕に残して思ひきつて門へ出た。飛行機がひっきりなしに飛んで道は
歩けぬ。又壕へ戻ったがふたゝび意を決して二中前大通りに出た。家を出てまもなく城岳一帯も盛ん
に爆撃を受け見る／＼猛火に包まれた。野田校長と學校の雲雀が丘の古墓に待避。墓の入口から二中
前を眺めてゐると投下される爆弾が二つ三つ四つと数えられる。爆破の度毎ずしんずしんと遠く地ひ
びきがつたわる。妻子は無事に避難出來たろうか。二中の校舎にも火がつき業火はたちまち天をこが
した。那覇港附近に黒煙がもう／＼とあがり萬雷の如き轟音がとどろく。ドラム罐集積所に點火した
らしい。四方八方に火を發しやがた那覇全市は火の海と化した。善興堂病院の入院患者十數名が壓死、
縣病院の患者多數が焼死、聯隊區司令官井口大佐が殉職、中村眼科醫が焼死と次々悲報が傳つた。夕
方になって漸く空襲がやんだので學校を出て牧志町にすゝみ、未だ燃えつゞけている電柱の下をくぐ
り焼けこげた牛の臭いをかきながら、炎の中を飛びこえ／＼壺屋入口に出た。陶器組合事務所は五〇
〇キロの直撃彈をくらい木々葉微塵に粉碎され、大きな彈痕が口をあいている。木片の散亂した丘の
岩かげに兵隊が死んでいた。丘側防空壕入口には黒い防空頭巾を被った婦女子がうろ／＼していた。

その先には歩哨が立ち那覇市内には一步も立ち入らさぬと、警戒を厳にしていた。仕方なくこっそり横道にぬけ警戒網を突破して二中裏大和人墓に廻る。松林の墓場に入ると燃えさかる二中校の黒煙がうすまいてゐる。墓石の中の煙りをはらいながらすすむ。電気會社の焼けこげた壁が三角定規のように炎と煙の中につつ立ち、縣病院・松山國民學校・二高女・大典寺と久茂地町から松山一帯が紅蓮に包まれている。人氣のない丘に一人立って燃えさかる全市の業火を眺めていると、地獄にでもさまようてゐるのではないかと思つた。嘗って浮島であつた時代から或は溝をさらい、埋立てをなし、石垣を積み粒々辛苦やがて美しい葺が並び立ち鐵筋の高層建築まで建つた近代都市の大那覇市が、たった今灰燼に歸しつゝある。東亞のあけぼの、あの港を船出して季節風に帆をはらませて遠く南海に航して御物城に寶を積んだその歴史も今焦土に化しつゝある。

私は二中の塀にそう細路をやつと見つけ出して火の海におりていった。二中市場附近も燃えつゞけている路はとう／＼ふさがつてしまつた。思ひきつて火の中を飛びこえ二中前大通りへ出た。餘燼の白煙をすかして見れば焼けこげた石垣の向うに家が二、三軒残っている。確かに我が家だ。直ちに石垣を飛びこえて防空壕をのぞいたが蒲團・モンペー・筵・食器類が散亂しているのみで妻子はいなかつた。鶏舎に一羽の鶏がコッコと鳴いていた。縁先の桑の木が燃えている。危機一發だつた。消しとめて亡き母の墓前にぬかづくように玄關に手を合せた。妻子は一體どこへ避難したろうか。機関

の叔母さんのところを訪ねると墓の中から「こゝには来て居りませんよ、どうしたんでしよう。」と一層不安をつのらせる。従兄の刑務所長官舎にもいなかった。牧志の叔母のところだろうかどこだろうかと、一晚中さがし歩いたがとう／＼行方が分らなかった。それから二、三日たつて仲榮間をさがし遠く東風平までさがしたがその甲斐もなかった。やっと五日目に二歳になる紀子を背負い四歳の民子の手をひいて郷里國頭へのがれたことが分った。

ふと我にかえると與那嶺・内田教官と仲宗根訓導と一緒に歩いている。空襲の翌日女子挺身隊を引率して崇元寺の裏で死體の片附けをしたのは與那嶺教官であった。

昨日から猛爆をうけている慶良間島は死のような静かな海の彼方に沈んでいる。那覇から僅か四、五十キロ沖合にある慶良間島には、人間魚雷が多く敷設してあるとの話だが米軍が占領するには難作もなかった。一應慶良間に上陸し、そこを足場として小祿飛行場をねらい、一舉に那覇を占領する作戦ではあるまいか。然し今朝からの艦砲射撃からすると港川に上陸するのも知れない。昨日の情報によれば久高島が艦砲をうけているという。さては知念岬からか。動亂のまきおこらんとする無氣味な静けさが島をつゝんでいた。

しす／＼と識名の坂をのぼる。後から炊事道具を積んだ荷車が一臺がら／＼ついて来る。蕭々としてふりかえりふりかえり黒い列はすゝんだ。やがて識名高射砲陣地にさしかゝった。石灰岩洞の壕の

入口は月影にほの、白く兵隊は晝と同じく壕の強化作業をつづけていた。兵士も生徒も互に手をふって勵まし合いながら過ぎた。こうしたら若い乙女等をつれて愈戦場に赴く。夢とも現實ともつかぬ氣持で一日橋への坂をおりていった。後からひいて来る荷車の車輪がぬけたといつて列はきれてしまった。一日橋を渡り二、三十米のところで休憩した。一小隊ぐらゐの兵隊がほこり、ばい街道を東へと急いで通った。無燈火のトラックが二、三臺過ぎた。民間人があわただしそうに荷物を負って歩いて行く。路傍の草の上にほこりを拂って腰をおろすと夏虫がしきりにすだいていた。荷車は待っても待っても來なかつた。やがて南風原驛の十字路を南に曲り、南風原國民學校前を通って喜屋武に入る。兵隊があちらこちらの擬装用の木の枝をギョ／＼折っていた。白骨が折れるような音だった。

兩側に壕があり兵隊が鶴嘴^{つばはし}を揮って作業していた。製糖工場をすぎ丘陵東側に出ると急に展望がひらけ、丘陵側面に十數棟の三角兵舎が立っていた。一月二十二日の空襲で學校の圖書館と寄宿舎一棟・教室一棟が爆破され、この材料を輜重兵が出勤して運搬してこゝに三角兵舎を建てたのであった。風呂場と炊事場がついており井戸も三ヶ所に掘ってあり各棟には班長室があった。木の香も新しい兵舎で、のこぎりくすを拂いローソクをともして、其の夜を明かしたが旅行にでも來たようで生徒は至って朗らかだった。